

このパンフレットは令和2年時点のもので、その後の調査結果をまとめた『足尾地域歴史資料集(中世)』が刊行されています。

本パンフレットの内容と異なる部分がありますので、最新の研究成果は『足尾地域歴史資料集(中世)』をご確認ください。

令和二年度速報展

# 発見!! 足尾の戦国時代



日光市歴史民俗資料館

伊達政宗使用獅子の黒印

足尾原村文書(齊藤家文書)とは

平成30年から日光市歴史民俗資料館では、足尾原村文書の調査を実施し、286点の古文書を確認しました。その多くは、齊藤家が江戸時代に原村の名主だった時の近世文書や明治期の近代文書ですが、その中には新発見の戦国時代の古文書も含まれていることが判明しました。

鹿沼城主で宇都宮氏家臣の徳雪斎周長(壬生周長)や佐野唐沢山城の佐野宗綱をはじめ、会津を勝ち取った直後の伊達政宗や上杉氏の家臣で唐沢山城を守備していた吉江景資とその一族の吉江資賢から発給された古文書などから、下野国内外の有力者が、足尾に注目していたことが窺えます。

また足尾には、戦国期の年号が入った仏像や石造物があり、中世の足尾の人たちの信仰や営みが見えてきました。

慶長15年(一六一〇)に足尾銅山が発見され、繁栄したと言われている足尾ですが、足尾原村文書が発見されたことにより、銅山で繁栄する以前の戦国時代の足尾が見えてきました。今後、本格的な足尾の戦国史研究を進めていかなければなりません。多くの皆様が発見された足尾という地域を考えるきっかけになれば幸いです。



天正14年(1586)頃の勢力圏  
『鹿沼市史 通史編 原始・古代・中世』をもとに作成

伊達輝宗の子。初代仙台藩主。天正17年(一五八九)6月に会津磐梯山麓の摺上原の戦いにおいて、会津の蘆名氏を滅亡させ、黒川城(後の会津若松城)に入る。

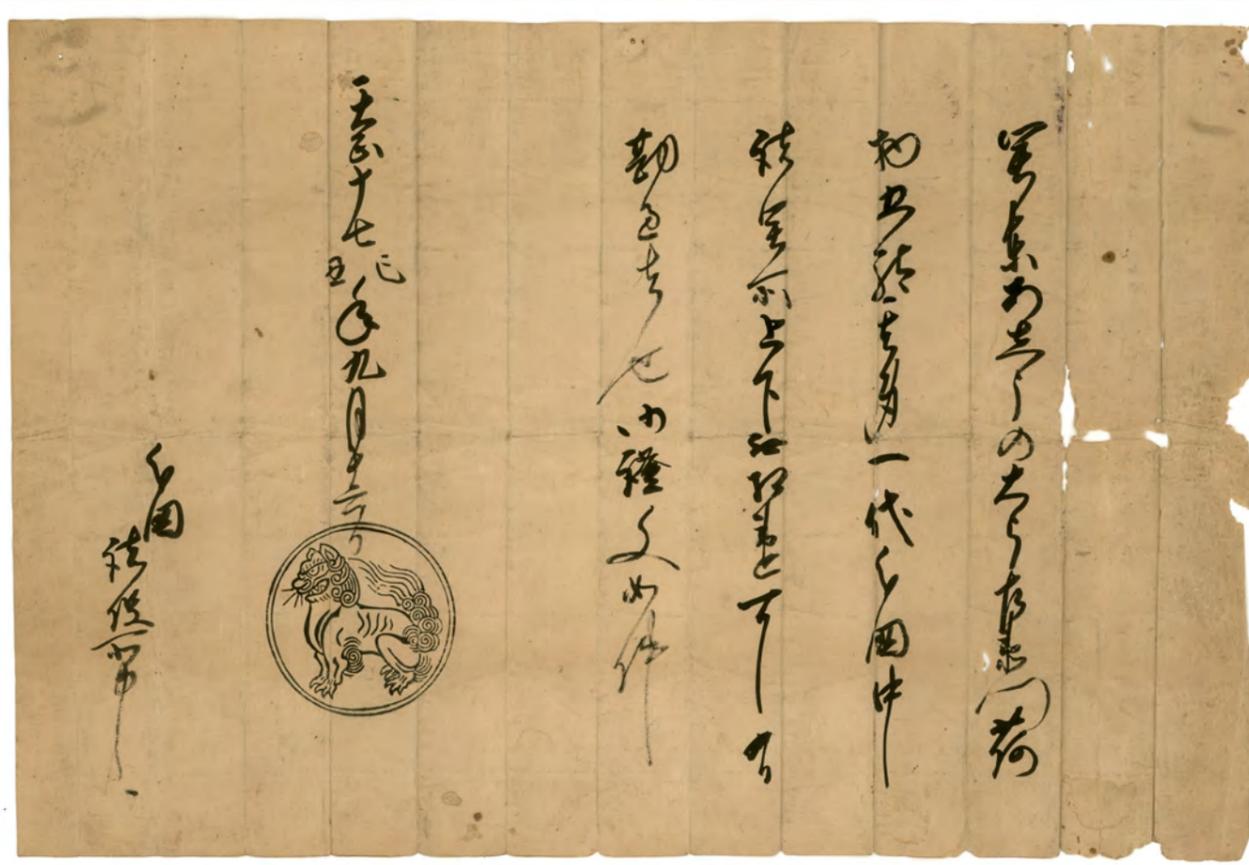


青葉城址の伊達政宗騎馬像  
(宮城県仙台市)

しかし政宗は、天正18年に起きた豊臣秀吉による小田原攻めに参陣するも、秀吉の惣無事政策により政宗が攻め取った会津などは没収される。

○伊達政宗

永禄10年(一五六七)〜寛永13年(一六三六)



①伊達政宗過所 (縦) 34.4cm x (横) 49.9cm

①伊達政宗過所

一足尾の太郎左衛門の通行を許可する

関東あしうの太郎左衛門、荷物五駄、其身一代分国中」諸  
関所上下無相違可有」勘過者也、仍証文如件、  
天正十七年九月十六日(黒印)

分国  
諸役所中

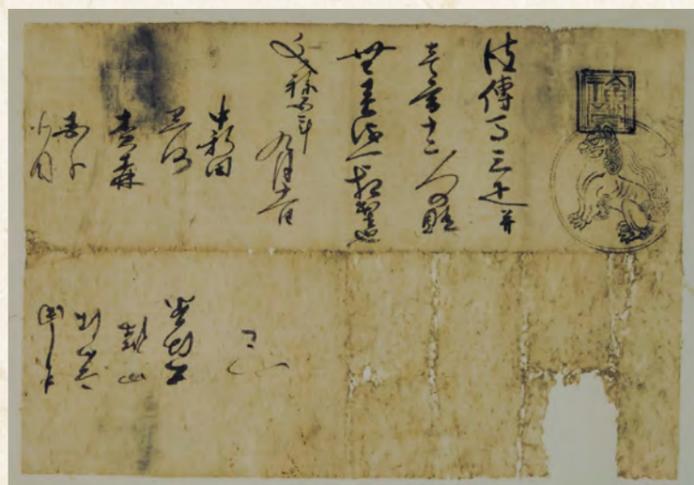
伊達政宗が、あしう(足尾)の太郎左衛門に与えた過所(関所の通行証書)。太郎左衛門は、一代限り五駄の荷物を運んで政宗の分国中の関所を自由に通行できることを保障された。

政宗は、天正17年(一五八九)6月に蘆名氏を滅ぼし、会津の黒川城(後の会津若松城)に入った。この文書はその三ヶ月後に政宗から発給されたものである。会津の領主が変わったため、太郎左衛門から政宗方に願い出て通行の権利の保障を求めたと考えられる。

伊達政宗黒印状について

現在、伊達政宗の獅子の黒印が使用され、原本が残っているものは、本史料を含めて五点のみである。その中でも本史料は、ほかの四点と比較すると文書の様式が異なる。本史料は「縦紙」と呼ばれる様式で、紙を横長に置いて、紙の全体に文字が書かれている。一方でほかの四点は「折紙」と呼ば

れる様式で、紙を横長に二つ折りにした様式である。「折紙」は、紙の上半分は文字が書かれ、上半分に収まらない場合は、紙を裏返して下半分に続きを書く。よって「折紙」は②「徳雪齋周長宛行状」のように折り目を境に文字が上下逆さまになることがある。「縦紙」と「折紙」では、「縦紙」の方がより上位の様式である。



伊達政宗伝馬黒印状(仙台市博物館半澤家資料)  
政宗が岩出山から柴田郡に至る間の奥州街道沿いの宿駅へ、伝馬三匹と12人分の食料提供を命じた伝馬状である。

(黒印) (黒印)  
彼伝馬三足并 志宿十二人の  
の頭、無異儀可相出者也、  
文禄五年  
九月十一日  
中野田  
黒河  
松森  
国分  
北目(以下折紙見返)  
まし田  
宮沢  
四保  
大河原  
以上



鹿沼城全景

壬生城主壬生綱房の三男。壬生綱雄の弟（叔父という説もある）。鹿沼城主。天文20年（一五五二）から天正7年までのおおよそ30年間の活躍がみられる（下の一覽表参照）。壬生氏は、もともと宇都宮氏の家臣であったが、兄綱雄らが中心になり幼少の当主宇都宮広綱を真岡へ排除し、宇都宮城を占拠する。この時、周長は綱雄に加担し

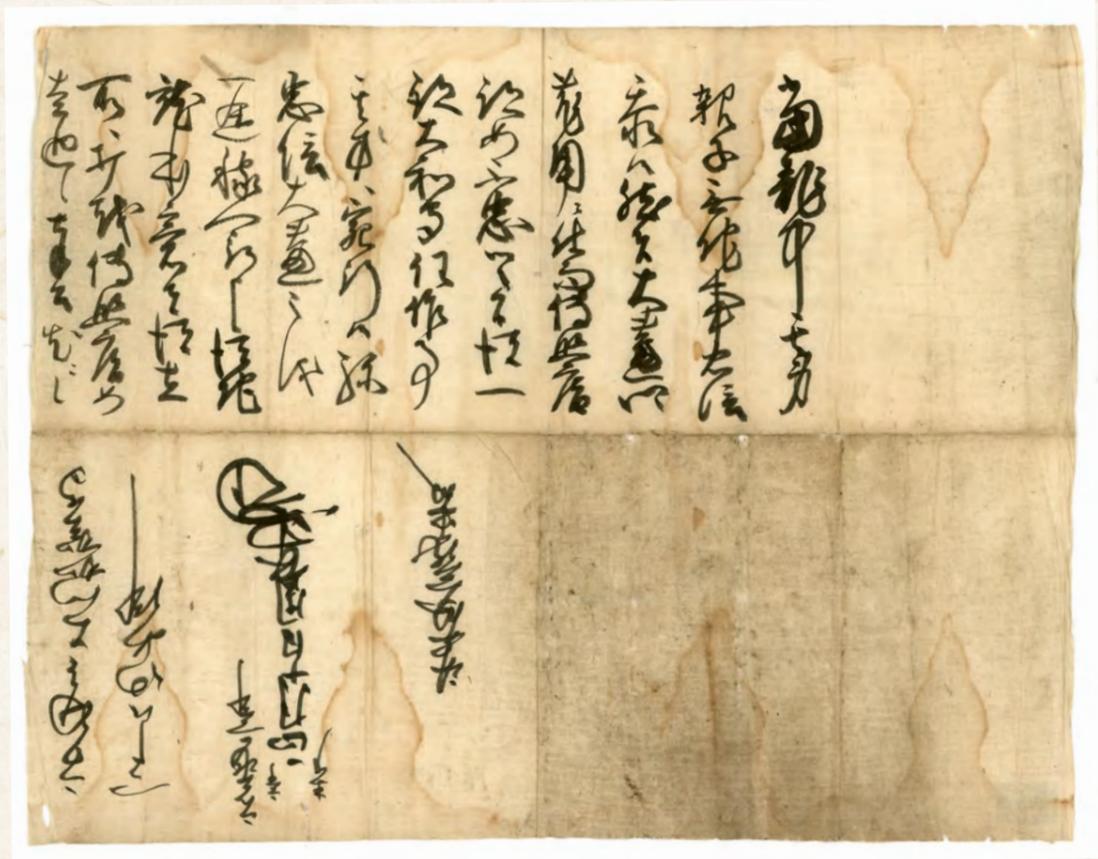
○徳雪齋周長（壬生周長）

？（天正7年（一五七九））

ていたようである。しかし、広綱が成長し佐竹氏らの支援により帰城すると、綱雄らは宇都宮城を退去している。

のち周長は、広綱・国綱父子を補佐し、常陸の佐竹氏や会津の蘆名氏との外交を担っている。その一方で、兄綱雄は、小田原の北条氏寄りの立場を取ったため、兄弟で対立するようになる。

綱雄は、永禄5年（一五六二）に宇都宮広綱の指示によって殺害され、これを機に周長は鹿沼城に入り、鹿沼や日光を支配する。しかし、周長は天正7年（一五七九）に甥（綱雄嫡子）の義雄に討たれる。その後、壬生・鹿沼・日光周辺は義雄が支配するところとなる。義雄は天正18年（一五九〇）の小田原攻めの際には、北条氏に味方し、小田原に参陣するも、小田原城開城の直後に陣中で死去し、壬生氏は滅亡する。



② 徳雪齋周長宛行状 (縦) 32.2cm × (横) 40.0cm

② 徳雪齋周長宛行状

—大蘆郷の所領を任せる—

当乱中、其身「親子無他事忠信」忝候、然者大蘆郷「菟角二仕而、伝照庵」跡如不忠候間、彼一「跡大和守任作事」其方へ宛行候、弥「忠信大蘆之儀、」一途稼可被申候、彼地「就本意者彼在」所へ打越伝照庵如「走廻候奉公尤二候、」巨細者大門加賀守「可申候、仍如件、」

元龜二年

辛未 正月十日 周長（花押）

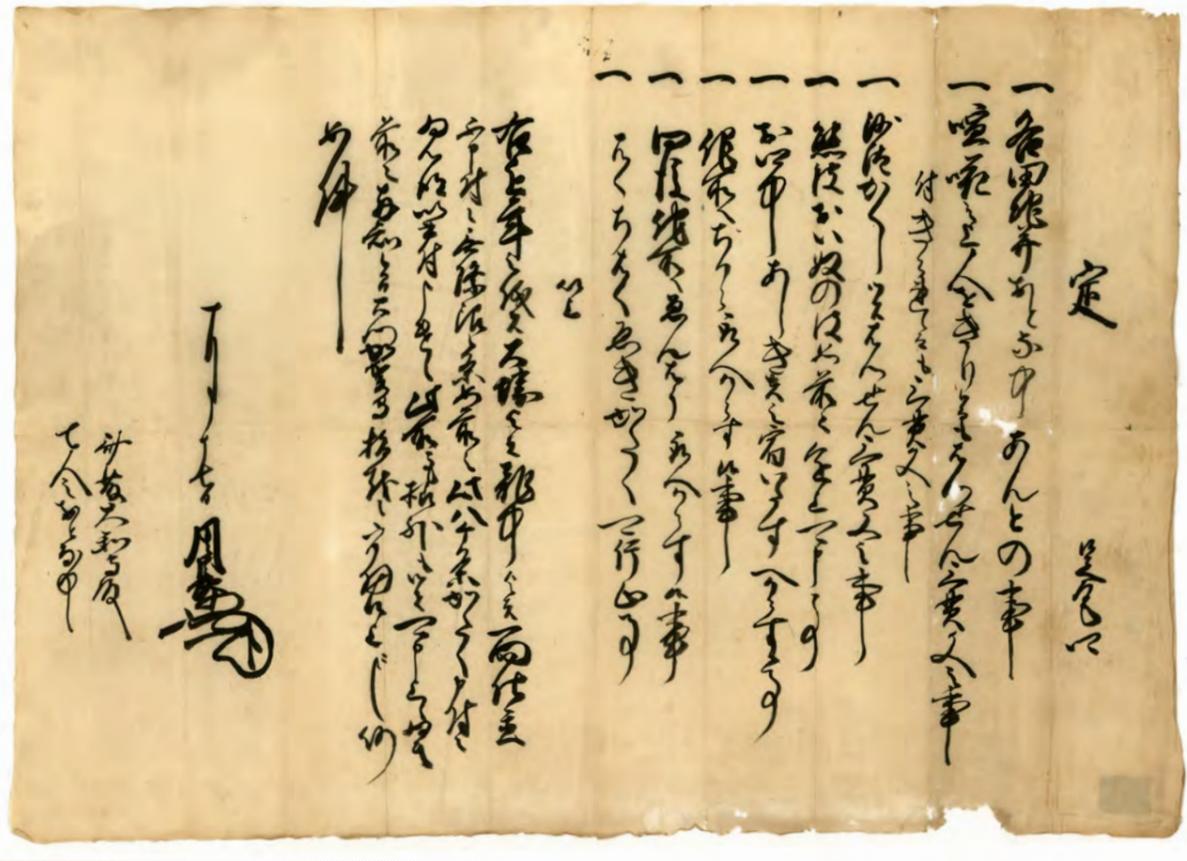
齋藤大蔵丞殿

「乱中」の功績により、大蘆郷（現鹿沼市）の所領を齋藤大蔵丞に認めた文書。徳雪齋周長が、元龜二年四月に引田（現鹿沼市）の高村氏に発給した文書の中にも「乱中」という言葉が出てくる。年号が同じであるため、どちらの「乱中」も同じ状況を指すと思われる。文中に「親子」、「大和守」とあり、宛先が齋藤大蔵丞であることから、齋藤大和守と齋藤大蔵丞は、親子の可能性がある。

徳雪齋周長（壬生周長）発給文書一覧（    は新出史料）

文書名	発給年	内容	宛所	文書群	番号
1 壬生周長寄進状 (折紙)	天文20年11月吉日 (1551)	壬生周長が伊勢神宮に岡本郷を寄進した。	粟野弥四郎太夫殿	佐八文書	311
2 徳雪齋周長宛行状	元龜2年正月10日 (1571)	徳雪齋周長が、「乱中」の働きを賞して、齋藤大蔵丞に大蘆郷内の所職を充て行った。	齋藤大蔵丞殿	足尾原村文書	②
3 壬生周長受領状 (もと折紙)	元龜2年4月9日 (1571)	引田における合戦に際し、壬生周長が高村某に越前守の受領を与えた。	高村越前守殿	高村文書	338
4 壬生周長安堵状 (もと折紙)	元龜2年4月17日 (1571)	壬生周長が高村越前守に対して宮内の地を安堵した。	高村越前守殿	高村文書	339
5 壬生周長書状	(元龜4年カ)4月20日 (1573カ)	壬生周長は清浄心院に武運長久の祈禱を念願した。	謹上清浄心院貴面	高野山清浄心院文書	347
6 壬生周長書状写	(天正元年カ)9月7日 (1573カ)	壬生周長が、後北条軍の小山栗志川攻めの様子を佐竹氏に伝え、出馬を強く要請した。	太田御館人々 (佐竹義重)	白河証古文書	349
7 壬生周長書状写	(天正4年)10月13日 (1576)	壬生周長が、日光町での外郎丸薬の販売独占権を宇野藤右衛門尉に認めた。	宇野藤右衛門尉殿	古文書相州・豆州 廿四	371
8 壬生周長書状	(天正5年カ)5月2日 (1577カ)	宇都宮広綱の懇望による出馬決定について、壬生周長が佐竹義重に礼言を述べた。	太田御館人々 (佐竹義重)	瀬谷文書	379
9 壬生周長書状写	(天正6年カ)5月24日 (1578カ)	壬生周長が、下総山川における北条氏政の動向等を芦名盛隆に報じた。	会津御館 (芦名盛隆)	歴代古案 七	394
10 壬生周長書状	(年未詳)6月19日	壬生周長は、諸般につき油断なきよう高村大蔵進に命じた。	高村大蔵進殿	高村文書	579
11 徳雪齋周長定書写	(年未詳)10月17日	徳雪齋周長が、足尾郷支配にあたる定を齋藤大和守と七人のおとな中に与えた。	齋藤大和守殿 七人のおとな中	足尾原村文書	③

・『鹿沼市史 資料編 古代・中世』（鹿沼市、1999）、『鹿沼市史 通史編 原始・古代・中世』（鹿沼市 2004）、佐々木茂「徳雪齋周長の政治的位置—一次史料の検討をつうじて—」『中世関東武士の研究 第四巻 下野宇都宮氏』（戎光祥出版 2011）に基づき作成。  
 ・丸番号は本パンフレットの掲載番号、その他の番号は『鹿沼市史資料編 古代・中世』（鹿沼市 1999）の掲載番号を示す。



③ 徳雪齋周長定書写 (縦) 35.5cm × (横) 51.7cm

③ 徳雪齋周長定書写

—この八ヶ条をしつかりと守ること—

定書 足尾郷

- 一、各田地并おとな中、あんとの事、
  - 一、喧嘩之上人をきり候而も、はつせん三貫文之事、  
付きられ候而も、三貫文之事、
  - 一、沙汰かくし候者、はつせん三貫文之事、
  - 一、熊皮・おいぬ(犬)の皮、如前々進上可申事、
  - 一、於郷中あしき者之宿いたすへからず候事、
  - 一、他所へちから取へからず候事、
  - 一、向後、他所へゑんはう取へからず候事、
  - 一、はくち(博打)・はくゑき(博奕)、かたく可停止事、
- 以上

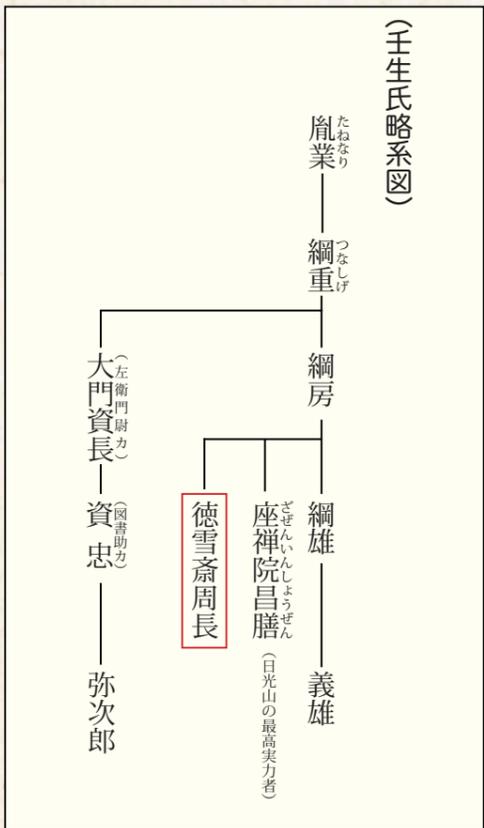
右近年之儀者、大堺と云、乱中と云、一向仕置」不申付候、無際限之条、如前々此八ヶ条かたく申付候、為心得以書付申遣候、此所二も袖外も候者可申上候、如其」前々両知候間、大門加賀守指越候、巨細口上二申候、仍」如件、  
十月十七日(年未詳) 周長(花押影)  
齋藤大和守殿  
七人のおとな中

徳雪齋周長が、足尾郷支配にあたり「定」を齋藤大和守と七人の「おとな」に与えた文書の写し。足尾郷内の権利の保障、罰則の規定、課役の負担などを定めるなど、周長による足尾郷支配の状況がみてとれる。文中に「乱中」という言葉が出てくるが、これは②「徳雪齋周長宛行状」に書かれている「乱中」と同じ内容と考えられる。そのため元亀2年(一五七二)から時間を置かず、足尾郷内の秩序を取り戻すために発給されたものと思われる。

宛名が「齋藤大和守」と「七人のおとな」を別に書いているのは、足尾郷の代表者である「七人のおとな」よりも齋藤大和守が上位に位置するものと周長が認識していたためと思われる。



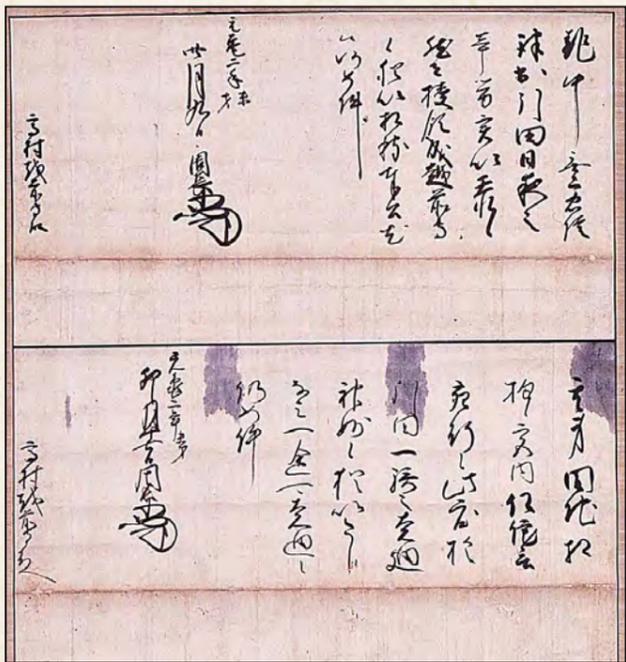
徳雪齋周長花押



大門加賀守について

②「徳雪齋周長宛行状」、③「徳雪齋周長定書写」には「大門加賀守」という人物が出てくるが、大門氏は壬生氏の一族であり家臣でもあった。大門氏の始祖資長は、壬生綱雄や徳雪齋周長の父綱房の弟とされる。資長ののちには、資忠、弥次郎と続く。大門資忠は、徳雪齋周長の家臣になっており、大門弥次郎は、宇都宮氏の家臣として倉ヶ崎城(くらがさきじやう)(現在の日光市)を守備したが、小田原の北条氏に味方していた壬生氏や日光山に攻められ、討死したとされる。

大門氏に「加賀守」という官途を称した人物は、これらの史料の他にはみられない。「大門加賀守」が、大門一族とどのような関係があるかは、今後の検討が必要になる。



高村文書(引田 高村富久氏所蔵)  
『鹿沼市の文化財—文化の再発見と心の継承』より転載  
上は元亀2年4月9日付受領宛行状、下は同年同月17日安堵状。この時期に引田とその周辺で「乱」と呼ばれる事態が巻き起こっていたことがわかる。徳雪齋はこれによって鹿沼城に権力を確立した。

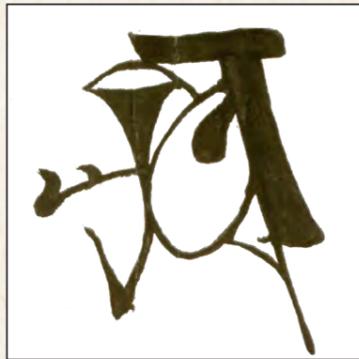
○佐野宗綱さのむねつな  
 永禄3年(一五六〇)〜天正13年(一五八五)

佐野昌綱まさつなの子。唐沢山城主。父昌綱は、勢力を伸張していた越後の上杉氏と小田原の北条氏に唐沢山城をたびたび攻められ、服従と造反を繰り返す。時として上杉氏もしくは北条氏の勢力を頼りながら、佐野氏を存立させてた。

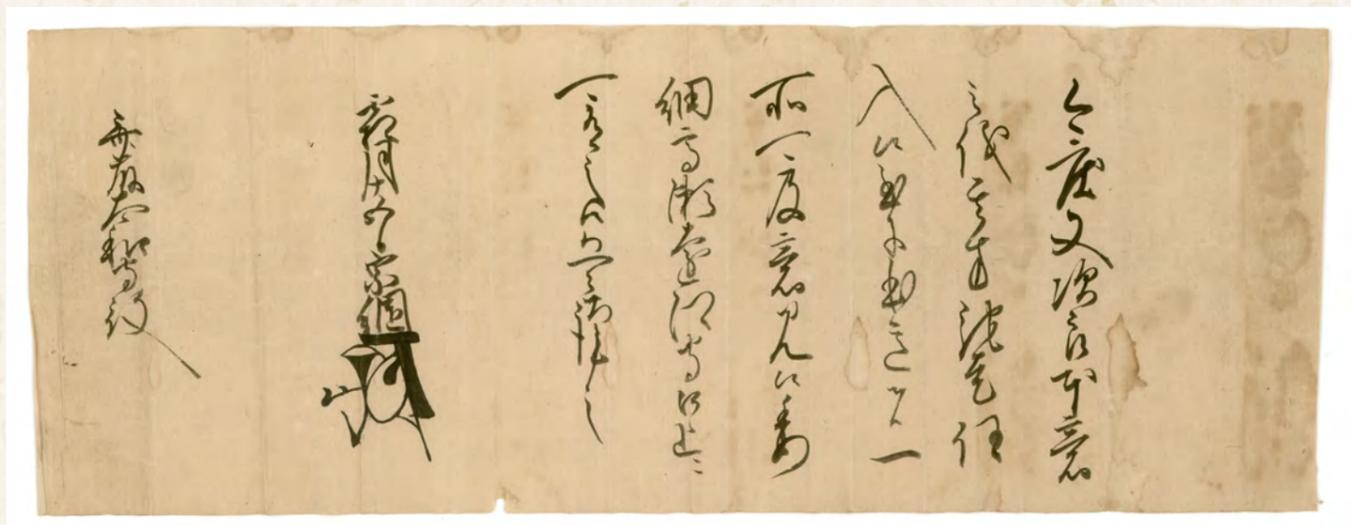
宗綱は、天正13年(一五八五)元日、北条氏方の長尾頭長ながおきながとの戦い(須花坂の戦い、現在の佐野市)で討死する。宗綱の死後、北条氏一族の氏忠うじただが佐野氏を継ぐことになり、家中は親北条氏と反北条氏に分裂する。

本文中の「高瀬遠江守」という人物について、佐野氏の家臣を記した「佐野武者記」(天正8年(一五八〇)作成)には、「高瀬遠江守正道」という人物が出てくる。佐野宗綱の活動時期を考慮すると本文中の「高瀬遠江守」は高瀬正道である可能性が高い。高瀬正道は、田沼山城守秀直の弟と記され、田沼秀直には高瀬紀伊守武正、高瀬遠江守正道、高瀬播磨守武清の三人の弟がいた。

なお高瀬紀伊守は、佐野宗綱の死後には佐野氏忠に仕え、天正18年(一五九〇)の小田原攻めの際には、六人の家臣を引き連れ、北条氏方として小田原に参陣するよう氏忠に命じられている。



佐野宗綱花押



④ 佐野宗綱書状 (縦) 18.2cm x (横) 49.9cm



渡良瀬川流域(足尾・群馬県東部周辺)の主な山城跡

足尾周辺の山城一覧

No.	城名	立地	城主	遺構
1	原城	山崖端	不明	堀・曲輪・土塁・石組
2	沢入城	崖端	松島氏	遺構なし
3	草木城	崖端	高草木氏	水没
4	座間城	崖端	梅橋氏	遺構なし
5	神戸城	崖端	小曾根氏	土塁・堀残存
6	小中城	山崖端	小中氏	遺構なし
7	三ヶ郷城	山	不明	堀切残存
8	五覧田城	崖端	久屋氏	遺構なし
9	神梅城(深沢城)	崖端	阿久沢氏	曲輪・土塁・横堀

### 渡良瀬川流域の山城

北条氏の侵攻は、渡良瀬川流域の各勢力にも影響を与えていた。金山城(現在の群馬県太田市)の由良氏や足利城の長尾氏などは、当初北条氏に反抗していたが、北条氏の勢力が強まると北条氏に服属するようになる。渡良瀬川流域にも多数の山城が築かれ、戦闘が起きていた。

### ④ 佐野宗綱書状

—又次郎を味方に付けよ!—

今度又次郎本意」之儀、其方馳走任」入候、至于本意者、「一」所可及意見候、委」細高瀬遠江守口上二」可有之候、恐々謹言、

(年未詳)  
霜月十五日宗綱(花押)

齋藤太和守殿

又次郎を本意にする(こちらの味方に付ける)ことについては、齋藤大和守に任せると佐野宗綱が約した文書。佐野宗綱は、天正初年から活動がみられ、天正13年(一五八五)元日に討死している。本史料は、その間の文書と判断できる。

なお又次郎に関しては、桐生を拠点にしていた桐生佐野氏の当主の通称が又次郎であるため、桐生佐野氏と考えられる。しかし桐生佐野氏は永禄10年頃(一五六七)から活動がみられなくなっており、佐野又次郎と佐野宗綱の活動時期が合致しない。そのため別の又次郎の可能性があり、今後の検討を要する。



唐沢山城主郭周りの石垣（栃木県佐野市）



吉江資賢花押

本文中の「神妙 御悦喜候」（今回の働きは）殊勝なことであり、お喜びになる）や「可被成 御直書候」（自筆の書状をお書きになることでしょうか）は敬意の表現がされており、これらの言葉の主語は上杉謙信と考

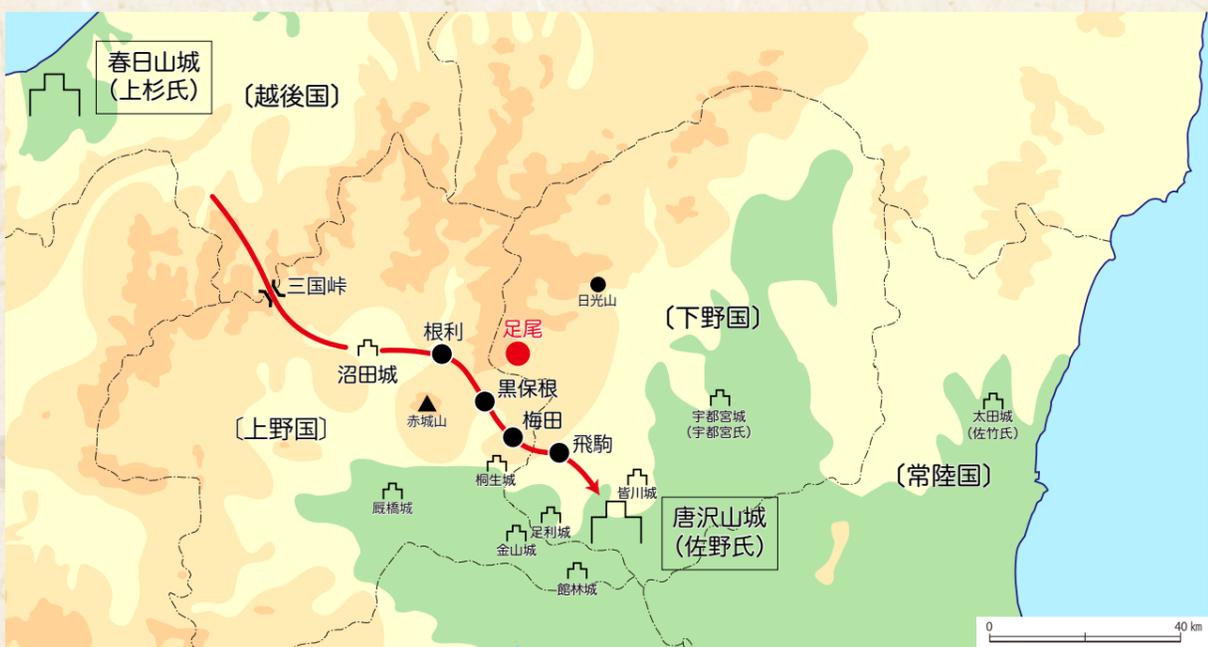
えられる。

北条氏の侵攻に悩んでいた下野の宇都宮氏や常陸の佐竹氏などは、上杉謙信を頼り北条氏に対抗しようとしていた。佐野の唐沢山城は、謙信が北条氏に対抗する勢力をまとめる上で重要な場所に位置していたため、謙信は唐沢山城を手に入れるために度々侵攻し、佐野氏は一時期謙信に服従する。その際、謙信は唐沢山城に家臣を派遣し、北条氏の侵攻から唐沢山城を守った記録がある。

上杉謙信による唐沢山城攻めは10回に及ぶという。

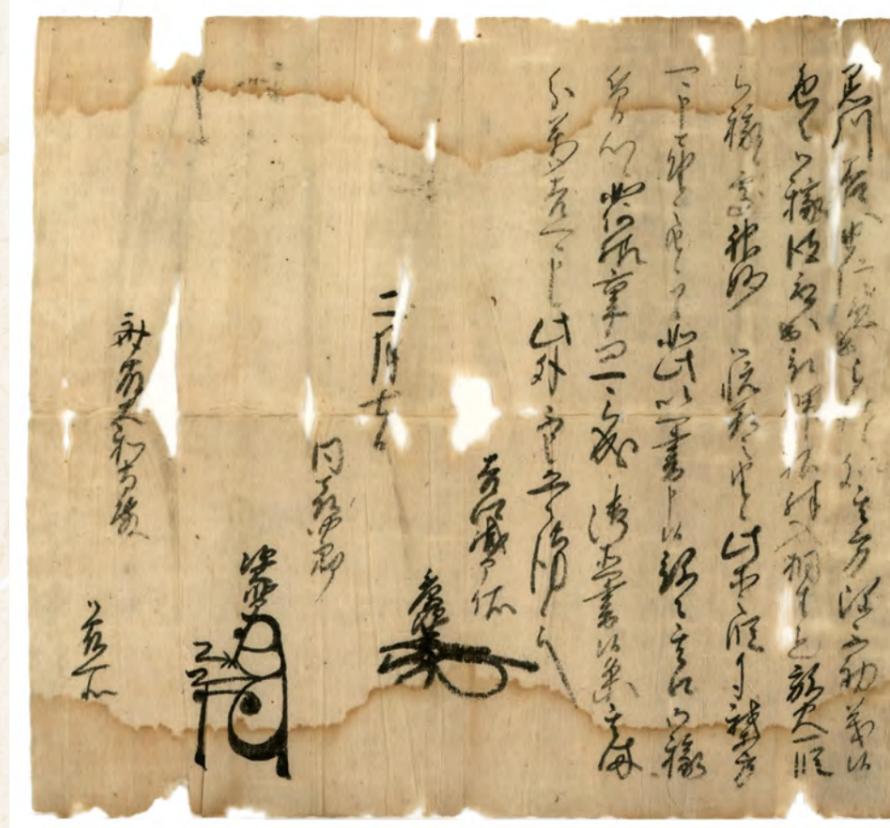


春日山城跡の上杉謙信像（新潟県上越市）



唐沢山城を攻める際の上杉謙信の推定ルート（根利通）

荒川善夫「下野唐沢山城に対する上杉謙信と相模北条氏の思惑」（『栃木県立文書館 研究紀要 第20号』栃木県立文書館 2016）・『田沼町史 第6巻 通史編（上）』（田沼町 1985）をもとに作成



⑤ 吉江景資・吉江資賢連署状（縦）28.2cm ×（横）31.0cm

⑤ 吉江景資・吉江資賢連署状

—謙信様もお喜びです—

黒川谷へ由信取出被□候処、其方弥不助義候、「色々御稼取（由信）取出被□□殊、入桐生迄放火一段」被稼候処、神妙 御悦喜之由候、此等之段自我等方「可申届之由候間、如此以一書申候、弥々其口御稼」簡心候、如何様重而可被成 御直書候条、其備分萬吉可申候、此外不申候、恐々謹言、

吉江織部佑  
 二月七日（年未詳） 景資（花押）  
 同喜四郎 資賢（花押）  
 齋藤大和守殿  
 御在所

上杉謙信（上杉輝虎）の家臣である吉江景資と資賢から、桐生に放火するなど黒川谷（渡良瀬溪谷）における齋藤大和守の戦功を賞した文書。足尾齋藤氏の活動範囲を示す貴重な文書である。吉江景資は、永禄7年（二五六四）と永禄10年（二五六七）に佐野の唐沢山城を守った記録がある。



吉江景資花押

「魔王山」と原城・西禅寺

足尾地域南西部にある通称「魔王山」で中世の山城跡が確認された（「原城」と仮称する）。原城は、南東に向かって延びた標高約650mの尾根の先端に位置する。城跡は、小規模ながら主郭を中心にくっつかの曲輪が付属し、主郭の中



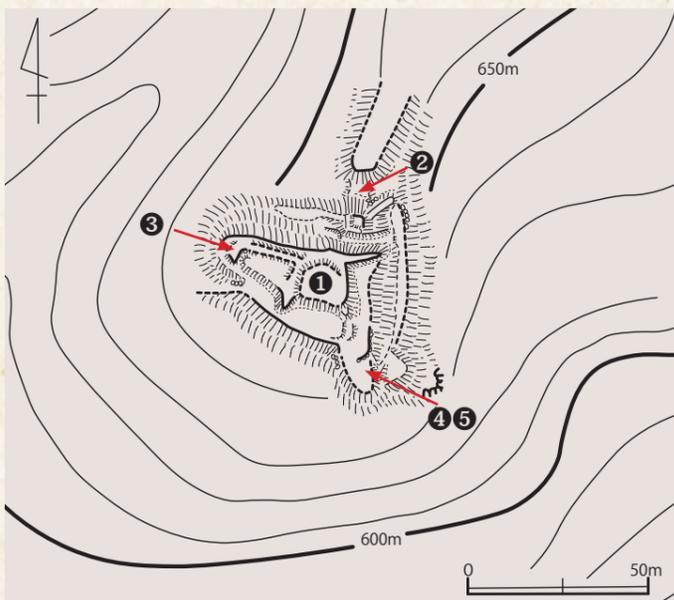
「魔王山」遠景



①主郭部



②北側の堀切部



「原城」の縄張図（関口和也氏作成）

北側には尾根を分断する大きな堀切を設けている。また、城跡の随所にみられる石組の痕跡も特徴的である。魔王山の麓には、西禅寺跡があり、その域には、釈迦堂と呼ばれるお堂や戦国期・近世期の石造物が多数存在する。釈迦堂には、木造阿弥陀如来坐像のほかにも天正期の年号が入った仏像が安置されていた。また石造物の中にも永禄期の年号が入ったものがある。



③虎口部



④南側の張出部



⑤南側張出部の石組

西禅寺釈迦堂の仏像

木造阿弥陀如来坐像は、西禅寺跡の敷地内に残された釈迦堂の中に安置されていた。所々に修復の跡がみられるが、鎌



釈迦堂横の石造物群



西禅寺跡に残る釈迦堂



木造阿弥陀如来坐像

倉時代以前もしくは鎌倉時代の作と推定される。

光背に施された七つの円は、北斗七星を示すと思われる。明治以前の足尾には妙見社（北極星や北斗七星信仰の神社）があつたことから、関連があると思われる。なお足尾の妙見社は、明治時代に移転し、磐裂神社と改称されている。

このほかにも、釈迦堂には戦国時代の天正の年号が入ったものを含む六体の仏像（14頁）が安置されていた。

AからFの仏像は、木造阿弥陀如来坐像と共に西禅寺跡の釈迦堂内に安置されていた。いずれも天正頃につくられたものとみられる。素朴な一木造であり、中央から離れた地方でつくられた雰囲気が見て取れる。  
このうち墨書がみられるのは、A、E、Fの三体であるが、Aは削られたような跡があるため詳細は不明である。EとFは、下のようについてあり、いずれも年号は天正である。



木造菩薩坐像 (A)



木造菩薩坐像 (D)



木造如来立像 (B)



木造観音菩薩坐像 (E)  
背面に天正 16 年 (1588) 墨書あり

(墨書)  
施主□□敬白「観音尊  
像一鉢処」天正拾六年  
戊子八月吉



木造菩薩坐像 (C)



木造観音菩薩坐像 (F)  
背面に天正 20 年 (1592) 墨書あり

(墨書)  
施主敬白「逆修善主根信心  
奉刻彫観音尊一鉢所」為二  
世之悉地諸願円満也」于時  
天正廿年壬辰拾月吉日

ちなみに同時期の古文書は、①伊達政宗過所(天正17年)と④佐野宗綱書状(年未詳)の二点である。

これらの仏像を通して、戦乱がまだまだ続く中、足尾に住む人たちが残した祈りのかたちを垣間見ることができる。

### 足尾と日光山

足尾原村文書の齊藤家からは、下の写真のように版木から麻布に印刷した不動明王の画像とそれを収納する収納箱も発見された。

下の写真は、左手に劔を持った不動明王であるが、箱書から本来は右手に劔を持った不動明王と対であったと考えられる。輪王寺には、版木から刷られた不動明王像が六点伝来しているが、いずれも右手に劔を持っている像容である。

天正14年頃の日光山は、壬生義雄と活動を共にし、小田原の北条氏に味方していた。天正18年の小田原攻めの戦後処理で、日光山は豊臣秀吉により多くの領地を没収され、山内、門前、そして足尾郷のみを安堵されることになる。



右劔左劔不動明王二幅黒漆塗収納箱 (底部)

(箱書)  
瀧尾御上人太輪坊御代也  
天正十四年 太才 二月廿八日 主泉蔵坊  
右劔左劔二幅奉摺



麻本木版刷左劔不動明王立像

